2023年の『キネマ旬報ベストテン』発表を見て

日本で最も歴史のある映画雑誌「キネマ旬報」は、毎年日本映画と外国映画のベストテンを発表していますが、「所詮は人気投票にすぎない（中略）しかし、専門家を以て任ずる批評家たちが選ぶ以上、なにがしかの目安としての意味を持っている」という某作家の意見に賛成し、2023年度の状況を観察することにします。因みにこのベストテンで最も多く1位の座に輝いたのは、小津安二郎のようで、「生れてはみたけれど」（1932）「出来ごころ」（1933）「浮草物語」（1934）「戸田家の兄妹」（1941）「父ありき」（1942）「晩春」（1949）「麦秋」（1951）があります。意外にも、あの「東京物語」（1953）は第2位ですし、黒澤明の「七人の侍」（1954）でさえ第3位と1位を獲るのはなかなか難しいようです。

さて、2023年の日本映画のベストワン作品は、阪本順治「せかいのおきく」第2位はヴィム・ヴェンダース「PERFECT DAYS」第3位は塚本晋也「ほかげ」という順位になります。ヴェンダース作品が日本映画になっているのは、制作会社が日本のプロダクションだったためのようです。かつて、大島渚の「愛のコリーダ」（1976）は外国資本の映画だったため外国映画扱いでした。2023年のベストテン選出で極めて珍しい現象が起きています。というのは、キネマ旬報のベストテン選出では、批評家による投票とは別に読者選出のベストテンがあるのですが、この1位作品である瑠東東一郎「Gメン」は批評家の投票で1票も入っていないのです。2023年は1点（1位に10点、2位に9点というように10位まで選出し、10位は1点ということになってます）以上獲得した作品は133本ありましたが、これに含まれてもいません。こうした結果を知った上で「Gメン」を見ましたが、落ちこぼれ高校生たちのケンカに明け暮れるヴァイオレンス映画ではあるものの、青春恋愛・友情ものといった色彩の強い、力作ながらどこか古めかしさの漂うドラマツルギーを感じました。ヴァイオレンスの本質に向けた鋭い洞察も感性も欠けています。あくまでもエンタテイメントを重要視したプログラムピクチャ的作品に思えました。批評家と一般観客の間にこれだけの乖離が生じることへの不安は拭えない気がしました。

個人的には過去の経験から11位から20位の中に面白い作品があることが多いと思っているのですが、12位「正欲」14位「BAD LANDS」19位「市子」同じく19位「渇水」といった新旧監督たちの活躍が見られました。私の個人的な一位は、荒井晴彦「花腐し」ですね、断然。

外国映画は、残念なことに中国映画の低迷が目立ったようです。チャン・イーモウ（張芸謀）「崖上のスパイ」（2023）115位、ロウ・イエ（婁燁）「サタデー・フィクション」（2019）70位、リ・ルイジュン（李睿珺）「小さき麦の花」（2022）25位、コン・ダーシャン（孔大山）「宇宙探索編集部」（2021）53位というのが主だったところでしょうか。順位で判断するわけではありませんが、チャン・イーモウ（張芸謀）は、ほぼ毎年新作を発表しながらも往年のパワーを感じないのは残念ですし、才能豊かなはずのロウ・イエ（婁燁）はコン・リー（鞏俐）を起用しながらも決して出来としては不満が残るものでした。リ・ルイジュン（李睿珺 1983年生）「小さき麦の花」は中国第五世代の映画監督の全盛期を彷彿とさせる感動作で、もっと評価されていいはずの作品でした。作家の川本三郎氏が外国映画の第1位に選んでいたことが何よりも救いとなりましたが。また、コン・ダーシャン（孔大山 1990年生）という若手の出現は今後の期待が高まります。また、旧作ですがエドワード・ヤン（楊德昌）の「エドワード・ヤンの恋愛時代」（1994）の再映は嬉しい出来事でした。

2023年にテアトル・シネマグループが行った「シャンタル・アケルマン映画祭」では、10本の作品が上映され、そのうち日本での初公開作品が5本含まれていました。シャンタル・アケルマン（1950〜2015）については、数年前に初めて日本で公開された「ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080 コメルス河畔通り23番地」（1975）に驚愕と戦慄を覚えましたが、その後これまで日本劇場未公開作品が概ね全作公開されたことになります。初公開だった「街をぶっ飛ばせ」（1968）「家からの手紙」（1976）「一晩中」（1982）

「ゴールデン・エイティーズ」（1986）「東から」（1993）の内、1本も1点も入らなかったのは実に寂しいことです。シャンタル・アケルマンを正当に評価し、その過去の作品を見ようとする批評家はいないのかと腹立たしく感じました。ヴィム・ヴェンダースの「PERFECT　DAYS」を見ていたとき、その日常のルーティン化した生活の描写から、思わず「ジャンヌ・ディエルマン」を思い浮かべ、きっと何かが起こると期待したのでしたが、ヴェンダースはその期待を裏切りました。随分ヴェンダースは変わりましたね。

　マーテン・スコセッシ、アキ・カウリスマキといった監督の活躍もさることながら、サム・メンデス「エンパイア・オブ・ライト」（2022　8位）、サラ・ポーリー「ウーマン・トーキング」（2022　10位）、ポール・ヴァーホーヴェン（1938～）「ベネデッタ」（2021　11位）、ポール・シュレイダー（1946～）「カード・カウンター」（2021　13位）あたりはよかったですね。短編作品ながらビー・ガン（毕赣）「ア・ショートストーリー」（2022）を見逃したのは悔やまれることでした。

（2024.2.17）